

国語教育と日本語教育は なぜ統合されないのか

—ことばの学習／教育にとって必要なもの

日本英語教育学会・日本教育言語学会
第47回年次研究集会 2016年3月4日(土)
早稲田大学8号館3階会議室

細川英雄

(言語文化教育研究所・八ヶ岳アカデミア)

本日の構成

- 国語教育と日本語教育の関係
 - 国語／日本語教育の問題点、共通の問題点
 - 問題点を克服するために一対話教育のはじまり
 - ことばの学習／教育にとって必要なもの
-

国語教育と日本語教育の関係

- 戦前の植民地主義下での国語教育—道徳思想教育、文学鑑賞中心
 - 台湾での直接法の開発(山口喜一郎)
 - 日本語教育の分離独立—1962年日本語教育学会設立(国語学・英語学関係者中心)
 - 1970年代からのコミュニケーション能力育成
 - 1980年代の中国帰国者・外国籍児童増加
 - 1990年代後半からのポストモダンの動き
-

問題意識の共通点と相違

- 母語獲得のヒントー訳読から活動中心へ
 - 60年代ー言語学との関係(言語の構造、形式と語彙・文型のリスト化とその立場)
 - 70年代以降ーコミュニケーション能力育成(構造から機能・場面へ)ー対話という手法(何について対話すればいいか不明)
 - 21世紀、立ち往生する国語教育(移民家族ほか、言語生活の貧困へ)
-

ことばの教育の種類

- 母語教育：国語教育(国語科教育)
 - 第二言語教育：当該の言語社会にあつて、その言語を学ぶ 例：日本語を学ぶために日本に留学する
 - 外国語教育：非当該言語社会にあつて、その言語を学ぶ 例：日本で英語ほかを学ぶ、海外で日本語を学ぶ
-

何のために言語を学ぶのか

- 母語教育：社会の構成員となる
 - 第二言語教育：言語習得→専門的知識→その社会で仕事
 - 外国語教育：言語習得(言語知識＋コミュニケーション能力)
- 言語が使えるようになる(身につける)とは？
-

言語を身につける最良の方法とは？

- 親を替える(もう一度生まれ変わる)
- その言語社会に浸りこむ(イマージョン)
- 特別な訓練を受ける？→魔法の杖はない

➤ 言語を身につけることを目的化しない

例：教養としての語学、言語学習によって母語を内省、複言語による相互文化理解

国語教育の問題点

- 日本人なら日本語ができると思い込んでいる（多様性を排除、ノン・インクルージョン）
 - 構造的な視点が乏しい（理解語彙・表現語彙の関係、文構造の理解と発達）
 - 文章理解が中心で受け身的、表現活動もパターン化している（個人一人一人の生活意識とのつながりが希薄）
 - 学習指導要領→教科書→指導書という制度へのクリティカルな視点が乏しい
-

日本語教育の問題点

- 構造と形式の注入—一方的な知識説明は、
訳読法・直接法も同じ
 - 構造・形式から機能・場面へ—機能・場面から
入っても中身がなければ対話にはならない
 - 対話の中身の充実—内容重視と対話の充実
とは質的に異なる、対話はタスクではない
 - コミュニケーション能力育成の先がない
-

共通の問題点

- いわゆる客観テストなどの評価でしか学習／教育を理解できない→目の前に見えるものしか見ない
 - 実践の方法や評価のあり方の根本を見つめようとしなない→教育理念の不在
 - 対象を一人の人間として見る視点が乏しい→ホリスティックな教育視点の必要性→多様性を尊重するインクルーシブな立場
-

問題点を克服するために

- 学習者・子どもを一人の人間として見る→ホリスティックな教育視点へ
 - 自らの教育理念を捉え直す→ことばの活動とは何かという視点
 - 共通の目標の設定の必要性→自己・他者・社会の世界へ
-

何のためにことばによって活動するのか

- ことばの活動の総体—身体としての感覚、精神としての感情、論理としての思考
 - 自己・他者・社会の関係—自分の考えていること(テーマ)の発信、他者からのコメントとやりとり、どのようにして社会に参加していくか(社会参加意識)
 - 一人の市民として、さまざまな場で社会的行為主体として生きること、市民性形成と対話の教育へ
-

対話教育のはじまり

- 答えのないやりとりの重要性—自分の考えていることを相手に発信すること、相手の言っていることを理解するために何が必要か、について考えること
 - 対話とは、それぞれの固有のテーマのやりとり—それぞれの持つテーマ(中身)を相互的に交換・共有することで、自らの居場所、立場、環境について社会的行為主体として考えること
-

言語の構造・形式と対話の中身

- 中身のない対話は存在しない、情報のやりとりだけのおしゃべりでは対話にならない
 - 言語の構造・形式を完璧に知らなければ、対話はできないか？—否、かたち(構造と形式)は必要に応じて、後からついてくる
 - 対話は、「なかみ」(中身)・「かたち」(容れ物)・「ば」(場)の三位一体によって形成される
-

さまざまな対話実践

- 国語教育と特別支援教育のインクルーシブな新しい地平—発達障害のある子どもたちとともに(原田, 2016)
 - 総合活動型日本語教育(牲川・細川, 2004)
 - 欧州評議会「相互文化的出会いの自分誌」のバイオグラフィ(バイラム, 2015)
 - キャリア・デザインのためのバイオグラフィ(細川・太田, 2017)
-

ことばの学習／教育にとって必要なもの

- 中身(自分の言いたいこと)を伝えようとする意志
 - 相手からの反応を寛容に受け止める態度
 - 他者ととともに人間のあり方について考えようとする思想
-

参考文献

- 細川英雄(1999).『日本語教育と日本事情—異文化を超えて』明石書店.
 - 細川英雄(2002).『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店.
 - 牲川波都季・細川英雄(2004).『わたしを語ることばを求めて—表現する希望』三省堂.
 - 細川英雄(2012a).『研究活動デザイン—出会いと対話は何を変えるか』東京図書.
 - 細川英雄(2012b).『「ことばの市民」になる—言語文化教育の思想と実践』ココ出版.
 - 細川英雄・三代純平(編)(2014)..『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版.
 - マイケル・バイラム(2015). 細川英雄(監修)『相互文化的能力を育む外国語教育: グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店.
 - 細川英雄・尾辻恵美・マルツチェラ・マリオッティ(編)(2016).『市民性形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて』くろしお出版.
 - 原田大介(2016).『インクルーシブな国語科授業づくり』明治図書.
 - 細川英雄・太田裕子編(2017).『キャリア・デザインのためのバイオグラフィ』東京図書(予定)
-